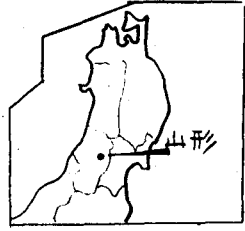


うたごえ新聞



東北の山やまは、すっかり冬の支度を整え、列車が北へむかうことに、かんさんとした田園が広がる。

東京から奥羽本線で四時間半。山形駅に降りると、東京とは格段に違う冷たい風が吹きぬけていく。そのむこうにうっすらと雪をかぶった蔵王が雄大に横たわっている。

この山を見あげながら、今十八年の沈黙を破って、病院の中に入った「うたごえ」が流れはじめました。山形の病院サークル

春をきくぶ新芽をのびを訪ねて

新春特集



'80

〈カット・横山由美子さん＝京都〉

山形市を中心に居を構え、七十余年の歴史を持つこの病院は(15年前民医連加盟)、十八年ほど前までは、うたごえサークルがあったものの、途絶えていました。

雪国育ちで

この病院の中に、もう一度うたごえサークルをうめようぞ、地域で「オンチコーラス」をつくってがんばって、歌好きの看護婦さんがいま

「いやあ、うたごえ祭典に参加して、初めは、若い人ばかりで場がいがいじゃないか、と思っただけれど、全日自労のおばあちゃんたち見たり、元気がでてきた、行ってよかった」と語る副院長さんや看護婦長さんら、廊下ですれちがう看護婦さんらのことばの交わりを見ても、この病院の家族的なあたたかい雰囲気、訪れた私にもすぐ伝わってきます。

佐藤西枝さん(三三)雪国育ちの白い頬を冬の冷たい風にさらしながら「歌が好きで、『オンチコーラス』をつくっていたの。四年前、山形のうたごえ祭典に参加して、『我が大地のうた』を聞いた時、ビリビリ感動したの

こんな歌、人間の心をうたう歌をうたうていきたい」と2人の出会い

しかし、月に十日を数える深夜勤務、これでは思うようにサークル活動もできない。病院の中になんとか、サークルをつくりたい、昔でできたもの……と思っていた時、またまた、歌好きの青年、三宅公人さん(三三)がこの病院に赴任。三宅さんは山形に来て初めてうたごえを知ったとい

と、昔の仲間も名をのびをあげてきました。一方、山形を中心合唱団、

「毎日(うたごえ)お年寄りを迎えていると、病気を治すというよりは、ただ医師だけではなく看護の手が大きく必要になってくるんですね。自治体とも手をくんで、もっと医療が真に患者さんのためになるようにやらなければならぬ」と思うの」と話してくれる。

一日二十四時間は、勤務と民主医療の活動に、そのあい間をぬけてうたごえに、たまには、ギターもど、忙しい西枝さんら。お正月も、勤務が組まれていきます。クタクタに疲れたながら、しかし最近では、宴会などでも「うたごえの歌うたうべ」の声が出る。「そんな時、ああ、やってよかったなあ……」と西枝さんらは思うようになっていました。



▲「勤務で全員集合できなかったの」至誠堂赤とんぼは病院中に明るい歌声を……(同病院の講堂で)

〈至誠堂病院コーラス〉

ズンチャッタ

(おじいちゃん)

バンチャッタの歌

(おばあちゃん)

山形センター合唱団は、今年この山形のうたごえ祭典をきき、地域、職場にサークルづくりををかけた、とりくみしました。歌唱指導も祭典参加のとりくみの中で朝日町に地域サークルが生まれ、ここ至誠堂病院にも職場サークルが誕生したのです。

後日、知り得たことは、その麻積(おみ)という駅が聖高原駅に改名していた

白根二六不可、万座四〇一部可、苗場六五可。スキー場の積雪状況である。ゴルフは格好よくないがスキーは何とも苦著らしいと。今年もスポーツ店は板やストックの大売り出し。

ふんだい

がんはる子持ち団員(2画)、世界をかける
ジャズ・秋吉敏子(4画)、年末年始番組(5画)新
春訪問はタ・カーポ、創作・合発講評(10画)